

信經の学び

— ニケヤ・コンスタンチノーブル信經 —



「信經」を手にするコンスタンチン大帝（中央）とニケヤ第一公会議の聖師父たち

[目 次]

信経の成立	1
信経第一箇条	3
神の天地創造	6
天地創造の七日間	9
「神の子」、「神の言」、主イイスス・ハリストス	13
生神女マリヤ	15
主ハリストスの降誕	19
主の昇天	21
聖神 ^o ・主、生命を施す者	24
一の聖なる公なる使徒の教会	27
一の洗礼	29
我望む死者の復活並びに来世の生命を、アミン	30

信経の成立



第1回ニケヤ全地公会のイコン

正教会信徒がよく知っている祈祷の一つとして「信経」があります。

「信経」は、これから正教会の信徒となろうとする者が、洗礼機密において誦する祈祷文でもあります。自分が信徒として何を信ずるのかを表明するためです。

（洗礼を受ける者が幼児の場合には、代父母が代わって誦します）。

「信経」には、「正教会の信仰とは何か」、「正教会の信徒は何を信ずるのか」ということが、正確な表現で端的に記されています。できれば、暗記しておきたい祈祷文の一つです。

歴史的に見ると、「信経」が今日の形で出来上がったのは、4世紀のことです。随分昔から存在している祈祷文であることがわかります。「全地公会」と呼ばれる教会の会議において(325年及び381年) この会議に参加した聖師父たちが編纂しました。

「全地公会」とは、キリスト教の神品や神学者が世界中（全地）から集まって、キリスト教の真実の教えを確立した会議のことです。4世紀から8世紀までの間に、7回開かれました。「信経」はこのうち第1回（ニケヤ）と第2回（コンスタンチノーブル）の全地公会で定められたもので、これを今日「ニケヤ・コンスタンチノーブル信経」と呼んでいます。

「信経」を理解しようとする場合、この祈祷文が12カ条（12の部分）から成り立っていることに留意すると、解りやすくなります。次のページに、「信経」を12カ条に区切ったものと、その12の各項目の要点を挙げてあります。

「信経」	(要点)	
1. 我信ず、一つの神・父全能者、天と地、見ゆると見えざる万物を造りし主を。 2. また信ず、一つの主イイス・ハリストス神の独生の子、萬世の先に父より生まれ、光よりの光、真の神よりの真の神、生まれし者にて造られしに非ず、父と一体にして万物彼に造られ、 3. 我ら人々の為、また我らの救いのために天より降り、聖神^o 及び童貞女マリヤより身を藉り人となり、 4. 我らのためにポンティ・ピラトの時、十字架に釘打たれ、苦しみを受け葬られ、 5. 第三日に聖書に適いて復活し、 6. 天に昇り父の右に座し、 7. 光栄を顕して生ける者と、死せし者とを審判するためにまた来たり、その国終わりなからんを。 8. また信ず、聖神^o ・主、生命を施す者、父より出で、父及び子と共に拝まれ、崇められ、預言者を以て嘗て言いしを。 9. また信ず、一つの聖なる公なる使徒の教会を。 10. 我認む、一つの洗礼、以て罪の赦しを得るを。 11. 我望む死者の復活、 12. 並びに来世の生命を。アミン。	→ 世界の創造主としての神について(特に神・父について)。 → 神・子である主イイス・ハリストスについて。 → 神・子が人体を藉ったことについて。 → 主イイス・ハリストスの受難と死について。 → 主イイス・ハリストスの復活について。 → 主イイス・ハリストスの昇天について。 → 主イイス・ハリストスが再び地上に来られること(再臨)について。 → 神・聖神^o について。 → 教会について。 → 洗礼機密(及びその他の機密を含む)について。 → 未来における衆人の復活について。 → 永遠の生命について。	神・父について 神・子について 神・聖神について 聖三者(三位一体の神「神・父」「神・子」「神・聖神」)について

信経第一箇条

「我信ず、一つの神・父全能者、天と地、見ゆると見えざる万物を造りし主を」



「聖三者」 アンドレイ・リュブリョフ

「信経」は聖体礼儀の中で参拝者全員で歌うことが多いので、この冒頭の部分を暗記している人も珍しくありません。しかし、この良く知られている短い一文を歌う時、この一文の中にどれほどのメッセージが込められているかということに思いを馳せる人がいるでしょう。

実は、この一文を構成している一つひとつの言葉、即ち「我信ず」、「一つの」、「神・父」、「全能者」、「天」、「地」、「見ゆる」、「見えざる」、「万物」、「造る」、

「主」というそれぞれの言葉に聖師父たちが込めたメッセージは気が遠くなるほど膨大なのです。

正教会の信仰において「信ず」とはどういうことなのか、「神・父」という言葉の背景にある「聖三者」（三位一体）とは何か、「全能者」とはどういうものか、「天」と「地」とは青空と地面のことではなく、霊的な世界（天使の世界）と物質的な世界のことを指しているということ、関連して「天使」とは何か、創世記には天地創造について何が記されているか…。これら全ての要素をこの紙面で網羅することは不可能ですが、幾つかのポイントを取り上げてみましょう。

最初に「我信ず」という言葉が出てきます。正教会の教えにおいて「信ずる」とはどういう心の状態を指しているのでしょうか。

神を信ずるということは、神の存在と神が行う諸業を実感することであり、また、神が人間の救いについて啓示している言葉を疑いなく素直に受け入れることです。聖書には、「信無ければ、神に悦ばるる能わず」（エウレイ 11：6）と記されています。「信仰が無ければ、神の心に適うことは不可能である」という意味です。さらに聖書には「人心を以て信じて義とせらるるを致し、口を以て承け認めて救わるるを致す」（ロマ 10：10）と記されています。心の中に信仰が在るならば、「その信仰を口で言い表すことによって救われる」という意味です。聖体礼儀の時に、会衆が口にだして「信経」を歌うのも、このためです。人前で正教の信仰について語ることを恥じたり、憚ったり、一時的な都合で隠したりするのであれば、それは真の信仰とは言えないでしょう。

また、「我信ず」の「我」ですが、大事なことは「我等」ではなく、「我」が主語だという点です。「最後の審判」において主・神の前に立つ時、私たちは一人です。最終的に問われるのは「我」の信仰です。祖先や家族の信仰も尊いものですが、自分が一信徒としてどのように人生を送るべきなのかということを自覚しなければなりません。

次に「一つの神・父全能者」と書かれています。これは私たちが信仰する神は、八百万神や偶像のようなものではなく、天地を創造した唯一の真の神であるという意味です。「全能者」という言葉ですが、これは見ゆると見えざる全てのものが、神の力と意思の及ぶ範囲内に在るということを表しています。従って、占いに翻弄されたり、他の宗教の諸神を“かけもち”することは、「一つの神・父」が「全能者」であることを信じていないことになります。

また、「神・父」という表現は、神は「聖三者」であるという三位一体の奥義を表しています。神は一つですが、「神・父」、「神・子」、「神・聖神^o」という三つの位格があります。神としてこれら三者は平等です。つまり、神・父が真の神であるように、神・子も真の神であり、同じく神・聖神^oも真の神です。そしてこの

三者は一つの神です。

この奥義を理論的に頭で理解することは困難です。聖師父たちは、三位一体とは神の完全な愛を表しているものであり、神と同じ完全な愛に到達できた者だけが、三位一体の奥義を把握することができると言っています。そして、実際に人が神の完全な愛に近づいていく度合いに応じて、その分だけ三位一体とは何かを感じられるようになるとも言っています。

10 世紀にスラヴ人の間に正教を伝道した使徒聖キリル・聖メフォディの兄弟は、「三位一体とは敢えて例えれば太陽のようなものである。太陽は一つであるが、三つの性質、即ち丸いという性質、光という性質、熱という性質を持っている」と教えています。これは未信徒への伝道向けに非常に簡略に図式化した表現でしょうが、とりあえず判るような気がします。しかし、それは図式的に頭の中で理解できるだけで、三位一体の奥義を理解するにはやはり私たちの信仰を通して神により近づくという信仰の実践とそれによって得る深い霊的な経験が不可欠です。

聖書には「神は神^o（しん）」であると書かれています。神は目に見えない霊的な存在であるという意味です。そして「在らざる所なきもの」、「満たざる所なきもの」であり全知全能です。

このような神を人間が認識する能力を失ったのは、人間の「罪」が原因です。人類最初の人間アダムとエヴァは神の戒めを守ることができずに楽園から追放されました。この時から、現在に至るまで、人間は罪に罪を重ね、神との距離は隔たる一方です。多くの人間は、神に造られた人間の本分すら忘れてしまいました。

※「神^o」:読み方は「しん」。聖ニコライによる正教会訳独自の表記法。ロシア語の「Дух」、英語の「Spirit」の日本正教会訳。

神の天地創造



「天地創造」のイコン 190 ロシア

神が創造した「見ゆると見えざる万物」の総体を「世界」と言います。

この「世界」が、主・神の被造物であるという確信は、正教の信仰の出発点となります。言い換えれば、もし「世界」は、主・神が造られたのではなく、他の原因によって造成されたものだという考えがあるとする、その考えは正教の信仰ではないということです。

創世記第一章第一節には

「元始に神、天地を造れり」と書いてあります。ここで言う「天地」とは、現在私たちが見ている空と地面のことではなく、見えない霊的な世界（＝「天」）と見える物質的な世界（＝「地」）です。見えない世界、それは神使の世界です。神使とは、身体を持たず、目に見えない不死の神^oです。創造された当初は全ての神使は善なるものであり、神は彼等に完全な自由を与えられました。即ちそれは自分が神を愛することを望むか否かという選択の自由も含むものでした。

暫くすると、最も光明にして強力な神使のうちの一人が、神を愛することを望まず、自分が神にとって代わることを望むようになりました。彼は神に敵対し、他の神使をもそそのかしました。これらの神使たちは本来の光と至福（＝喜び）を失ったのです。天から堕ちたこれらの神^oを正教会では悪魔又は魔鬼と呼んでいます。彼等の頭（かしら）をサタナと言います。神の敵という意味です。正教会で「傲慢は全ての罪の母」と言われる所以です。



アダムとエヴァの樂園追放

とエヴァの子孫であり、全ての人間の中に罪の痕跡が入り、程度の差こそあれ、罪から自由な者は誰一人としていないのです。

悪魔は、昔から今日に至るまで、人間が神の言うことを聞き、神の前に従順謙遜であることを忌み嫌い、神に逆らって罪を犯すように誘います。最初に悪魔の罠に陥ったのは、神が創造した最初の人間たち（＝アダムとエヴァ）でした。神の意志に反することを知った人間は、樂園の至福を失い、死と病と苦悩を知る者となりました。その後の人間は皆、罪を犯したアダム

しかし、樂園を失った人間に対する神の憐れみによって、私たちは人類の救世主を賜りました。「人類の救世主」とは、一度絶たれた神と人間との間の調和を復活させ、人間が再び神の国に戻ることを可能にしてくれた救世主、神の子イイスス・ハリストスです。

現代に生きる人間は、この天地創造における主・神の慮りから遠く離れてしまいましたが、霊のどこかでそれを感じるチャンネルを失ってはいません。澄み切った空を見るとき、美しい花を見るとき、広い海を見るとき、私たちが自ずと「神さまは何と偉大な世界を造られたのだろう」と感ずるのは、このチャンネルに拠るものです。

正教会では、神は人間を「神を認識し、神に倣い、永遠の生命を嗣ぐ」ために創造したと教えています。これが正教会の教えている「人間の本分」です。

この本分をまっとうするために人間に与えられた環境、それが「世界」です。「人間の本分」を自分の子供に教えることは、正教信仰の継承の第一歩です。

私たちがこの本分を全うするためには、まず「神」について正しい理解を持っていなければなりません。

神とはどのような存在で、私たち人間は神とどのような関係にあり、神は私たちに何を求めているのか、ということについて、人間は神に拠らずして自力で考え、理解することはできません。今日私たちが、神について知っていること—それは、神が私たちに「啓示」してくれたことに拠るのです。神がご自分のこと、また人類に対する慮りのことを人間に教えてくれなければ、人間の限られた智恵でそれを知ることは無かったのです。天地創造の時に神を直接知っていた唯一の人間、それはアダムとエヴァです。その後、楽園を追放された後の時代の人間は、次第に神のことを忘れ、自分勝手な生活を送り、自己中心的な判断に走るようになりました。

そこでモイセイはじめ、諸預言者たちは、神についての正しい教えを、神に導かれながら文字に表わしました。これが旧約聖書です。まわりが退廃していく世の中にあって、預言者たちとは、「神の啓示を正しく受けとめることのできる聖神^o性（せいしんせい）のチャンネルを護り持っていた人たち」です。



モイセイの石版が象徴している「旧約聖書」の土台の上に「新約聖書」が立脚している

救主イエス・ハリストスが、この世に現れたとき、主ハリストスは、神についての知識を旧約の時代よりもよりはっきりと、完全な形で人間の前に教え示しました。それは旧約の教えの上に立脚する、神についての完全な理解でした。その教えが記されているのが「新約聖書」です。

天地創造の七日間



「光の創造」 グスタフ・ドレー画

神による天地創造は、旧約聖書の創世記第一章から第三章に記されています。

ここで一つ触れておかなければならないことは、「聖書」という書物が編まれた目的とこの書物への接し方です。

私たちハリストイアニンにとって聖書の中で一番大切な部分
は新約聖書、特にその最初の部分である「福音経」（マトフェイ伝、マルコ伝、ルカ伝、イオアン伝）です。教会の至聖所の宝

座の上に置かれているのが「福音経」であることから、この書物が私たちの信仰の中核であることが判ります。

それでは私たちにとって旧約聖書とは何でしょうか。一言でいえば、旧約聖書は、新約聖書を正しく理解するための土台であると言えます。もし旧約聖書が無かったら、私たちは主ハリストスが救世主であることも、「救世主」の意味も、「贖罪」の意味もわからなかったでしょう。さらには新約聖書が「聖書」であることさえ理解できなかったでしょう。その意味で旧約聖書は、私たちの信仰の「土台」です。旧約聖書と新約聖書の両書を一貫して貫いているテーマは「神による人類の救贖」です。そして、この書物を正しく読み取るために求められるものは「信仰」です。何故ならば、「どうしたら人間は救われるのか」、「なぜ人間は救われる必要があるのか」ということを教えているのが「聖書」だからです。従って、聖書の諸書札の中で比較的歴史的記述の要素が強い創世記にしても、歴史学や生物学の教科書ではないのです。

「聖書の1ページ目は福音書の1ページ目です」と言う時、そこには次の様な意味が含まれるでしょう。普通の文学書のように第1巻の第1頁が最初のページという発想で旧約聖書の第1頁目から聖書を読み始めたとしたら、遠くない将来挫折するのは目に見えています。この読み方で私たちハリストイアニンにとって最も大切な福音書まで辿り着くためには、相当な忍耐が必要です。特に旧約聖書は原語の知識が無かったり、手ほどきしてくれる神父さんがいなかったりすると「救い」どころか「誘い」になる場合もあります。

創世記も例外ではありません。創世記に記されている天地創造の要点は、神が何も無いところからご自分の意思によって全てを創られたという点であり、見えるものは見えないものから創られ、段階を踏んで育まれ、成長していくことを前提としていることを理解していなければなりません。天地創造の「7日間」も、この「7日間」という解釈さえ、注釈を必要とします。「7日間」と聞くと、24時間の7倍、つまり一週間だというのが普通です。しかし旧約聖書が書かれた原語では、この「日」は一定の時間の流れを表す単位で、それは24時間よりもずっと長いのです。どのくらい長いのかと言うと、神が天地創造を始められたのを1日目とすると、現在はまだ7日目が続いているというのが教会の解釈です。この世の終わりである最後の審判は8日目になり、完全な神の国が現れると教会は教えています。「8」は「完全」を表します。

以上のようなことを踏まえたうえで、旧約聖書に記されている「7日間」に何が起こったのか、順番に整理しておきましょう。

- 第一日 — 光の創造。
- 第二日 — 蒼穹の創造。
- 第三日 — 陸地と海と草木の創造。
- 第四日 — 太陽と月と星の創造。
- 第五日 — 魚と鳥の創造。
- 第六日 — 獣と家畜と地に這うものと人の創造。
- 第七日 — 神はすべての作業を終えて休まれた。

創世記第二章には、神は土の塵で人を造ったと書かれています。ここで思い出されるのが埋葬式の祈祷文です。

「昔我を無きより造りて、爾が神たる像にて飾り、戒めを犯すに困りて、復我を我が出でし地に帰しし主や、我を神の𠂇に適える位に升せ、古の美しきを以て我を改め給え」。

この祈祷文は天地創造のプロセスにおける人間創造の原点を的確に表しています。

聖金ロイオアンは、この「土の塵」について次のように言っています。

「預言者モイセイ（モーセ）は、既に創世記の第一章において、人の創造は六日目であったと書いたのに、第二章で再び人の創造についてこのような補足をしているのは、常に人がこのこと（人が土の塵から造られたこと）を記憶し、自分があたかも何者かであるかのような幻想を抱かないように戒めているのである」。

さらに神は土で造った人の鼻に命の息を吹き込まれ、それによって人は生きた者となりました。これが神の「像」と神の「𠂇」に従って創られた人の最初です。

ところで創世記に記述されている神の「像」と「𠂇」という言葉ですが、どのような言語に訳すにしても翻訳が難しそうな二語です。そして言葉だけ翻訳してみても、意味が通じづらい言葉でもあります。ニッサの聖グリゴリイはこの箇所について次のように言っています。

「最初の像というものは、我々人間が創造された時点で有していたものであり、後の𠂇というものは神の完全さにより近づくために、個人の努力によって到達するものである。しかし、この部分が全く欠落する場合もあり得る」。

このニッサの聖グリゴリイの解釈を念頭に置いて、もう一度先ほどの埋葬式の祈祷文に戻ると、なるほど「像」と「肖」の言葉の使い分けの意味がはっきりします。「像」は最初から神が人に与えてくれたもの、「肖」は自分が「神の肖に適える位」に到達できたかどうかを試されるものであるということが改めて認識できます。

このように旧約聖書は一語一句が一見難しく見えますが、聖師父の教えを道しるべとして辿っていくと、神が創造された世界をより深く感ずることができます。

その後、神はエデンに一つの園を設け、造った人間を置きました。創世記第二章にはその場所が記されています。エデンから流れ出した川は四つの支流を持っており、その名はフィソン、ゲオン、ヒデケル、エフラト（ユーフラテス）と言いました。

この辺りの記述から、この樂園はメソポタミヤ平原の南、ペルシャ湾とバビロンの間に位置していたと考えられています。しかしアダムとエヴァの樂園追放の際、再び人間が命の木に近づかないように、この樂園に通ずる道にはヘルヴィムと炎の剣が置かれ、人間は二度とこの道を通ることはできなくなりました。この地を聖ニコライは「地堂」（地上の樂園）と訳しています。これに対して「天堂」（天の樂園）は、最後の審判の後に永遠の命を得る者が入る神の国です。

創世記の正教会訳（聖ニコライ・中井木菟麻呂訳）は、「三歌斎経」（または「大斎第一週奉事式略」）の中に収録されています。この箇所は大斎第一週の間、晩課で誦経されます。正教会文語訳ならではの格調高い素晴らしい翻訳で、「正教の香り」がします。

「元始二神天地ヲ造レリ。地ハ形ナク虚シクシテ、暗ハ淵ノ面ニ在リ、神ノ神°水ノ面ニ覆育セリ。神曰ヘリ、光アルベシ。即光成レリ…。」

「神の子」、「神の言」、主イイスス・ハリストス



「ハリストス復活！」

「信経」の第二箇条では、聖三者（三位一体）の第二位である神・子、主ハリストスについて次のように記しています。

「また信ず、一つの主イイスス・ハリストス神の独生の子、萬世の前に父より生まれ、光よりの光、真の神よりの真の神、生まれしものにて造られしに非ず、父と一体にして万物彼に造られ」。

神・子が人間の体を取り、幼子としてこの世に降誕した時、幼子はイイススと名付けられました。生神女マリヤに神使ガヴリイルが福音（藉身）を告げた時に、イイススと名付けるように伝えたのです。イイススとは、「救う者」という意味です。「ハリストス」という呼び名は、救世主を待ち望んでいた旧約時代の預言者たちが、いつの日か世に来るべき救世主をこのように呼んでいました。「ハリストス」とは「油つけられし者」、即ち「神・聖神^o」の特別に豊かな恩寵を受けた聖なる者」という意味です。

神・子であるイイスス・ハリストスは、また「主」とも呼ばれます。真の神だからです。神・父が真の神であるように、神・子も真の神であることについて、聖書には次のように記されています。

「太初に言在り、言は神と共に在り、言は即ち神なり。この言は太初に神と共に在り。万物は彼に由りて造られたり、凡そ造られたる者には一も彼に由らずして造られしは無し。彼の中に生命有り、生命は人の光なり。光は暗に照り、暗は之を覆わざりき。

…言は肉体と成りて、我等の中に居りたり、恩寵と眞実とに満てられたり」
(イオアン1：1-5,14)

上記の福音書の箇所は、復活大祭の聖体礼儀で誦読される箇所の一部です。

この中で「言（ことば）」と記されている部分を「神・子」（＝主イイスス・ハリストス）と置き換えて読むと、主イイスス・ハリストスの神性について述べられていることが判ります。

それでは福音記者聖イオアンは、どうして主イイスス・ハリストスのことを「言」と記しているのでしょうか。これは、彼が神の啓示から得た表現であると聖師父は言っています。彼がパトモス島で記したとされる「黙示録」には、主イイスス・ハリストスについて、「その名は〔神の言〕と呼ばれた」と書かれています（黙示録19：11-13）。

また聖師父は、福音記者聖イオアンが主イイスス・ハリストスを「言」と表現していることについて、私たちが日常的に使っている「ことば」になぞらえて次のように説明しています。

「ことばと思考が別な物であるように、言である主ハリストスと神・父は別な物である。そしてことばが思考から生まれるように、言である主ハリストスは神・父から生まれた。そしてことばと思考が存在形態は異なっても、その意味内容の本質において一体であるように、言である主ハリストスと神・父も二つのものでありながら一体である」。

このように主ハリストスは見ゆると見えざる万物が存在する以前、全てのものの太初に神・父と共に存在していたのです。そして万物は神・父と一体である彼に由って造られました。主ハリストスの内にある生命は、私たちに神を識る智慧を与え、この霊的な智慧は、神の国への道を照らす光であり、そしてこの光はいかなる暗闇によっても覆い隠すことができない光であると聖書は私たちに眞の神の道を教えています。

生神女マリヤ



「七本矢の生神女」のイコン

8月13日(新暦26日)に記憶される生神女のイコン。預言者シメオンが預言した生神女マリヤが受ける苦しみ、精神的な痛みを表わしたもの。剣が七本あるのは、生涯にわたる「全て」の苦しみを表わしている。正教会において「7」は「全て」または「満ちている」ことを表わす。

の胎を通る必要がありました。正教会の祈祷文は、この神の業について次のように言い表しています。

「天は畏れ、地の極は驚けり。神は身にて人々に現れ」

(イルモス第8調第9歌頌)

「天は畏れ」というのは、神使たちですらこの出来事にびっくりしたという意味です。また、「爾(生神女マリヤ)の胎は天より広きものとなりたればなり」(前載のイルモス)という表現もされています。これは「地は載せ難きものに洞を献ず」(降誕祭コンダク)という表現とも共通するところがあります。つまり、見ゆると見えざる万物を造られた創造者である神を、受造物がその内に入れる(または戴く)ことになったという、前代未聞の奇蹟を言い表しています。

生神女マリヤについて、信経には次のように記されています。

「我ら人々の為、また我らの救いのために天より降り、聖神^o 及び童貞女マリヤより身を藉り人となり」。

とても短い記述ですが、ここから判ることの一つは、主イイスス・ハリストスは、マリヤという女の人から身を藉った(「藉身」ということです。

真の神が真の人間として肉体を持つためには、人間の女性

生神女マリヤは「三位一体の神（聖三者）」全体を胎に宿したのではありません。生神女マリヤの胎に宿ったのは、三位一体の神の第二位である神・子イイスス・ハリストスでありました。

これについて正教会の祈祷文は次のように記しています。

「生神女よ、爾は世の無き前より在す悟り難き主、無形の父と同永在の者、聖三者の一位の混合せざる神性の受けし肉体を体内に宿せり」
(降誕祭早課セダレン)

この三位一体の神（聖三者）の奥義の深さは、次の祈祷文によく表れています。

「童貞女は生みて胎は損なわれず、言は身を取りて父を離れず」
(降誕祭晩堂大課挿句のステヒラ)

上記の「言」とは神・子イイスス・ハリストスであり、「父」とは神・父を指していますが、この表現は復活祭の次の祈祷文を思い起こさせます。

「像り難きハリストスよ、爾は体にて墓にあり、霊にて神として地獄に在り、盗賊と偕に天堂に在り、父及び聖神^oと偕に宝座に在りて、一切を満て給えり」(聖大パサハの主日第一時課トロパリ)

主イイスス・ハリストスが十字架に釘打たれた聖大金曜日の後、体は墓にありながら、アダムとエヴァをはじめとする旧約時代の義人たちを地獄から引き上げるために地獄に降り、同時に三位一体の神として、神・父及び神・聖神^oと共に宝座に居り、「在らざるところ所な無き」神として一切を満たしていたという真理です。

つまり、同じように、神・子イイスス・ハリストスは、体において生神女マリヤの胎に在りながら、三位一体の神として、神・父と共に居たということをこの降誕祭のステヒラは私たちに教えています。旧約聖書時代の義人たちは皆、神・父が約束された

救世主の出現を心待ちにしていました。その救世主とは神・子イイスス・ハリストスでした。そして救世主の出現のためには、神・子の籍身のために相応しい「神聖なる潔き童貞女」、生神女マリヤを待つ必要がありました。

生神女マリヤは「神の母」とも呼ばれます。生神女マリヤ自身は神ではなく、私たちと同じ人間です。しかし、正教会の祈祷文に「ヘルヴィムより尊く、セラフィムに並びなく栄え」とあるように、人間でありながら、神使よりも尊ばれるべき存在であることが判ります。

人間として、その高い聖神^o性ゆえに尊崇される人たちとして「聖人」がいますが、「聖人」に神への転達を祈る時、私たちは「我らのために神に祈り給え」と言って仲介を求めます。しかし、生神女マリヤに祈る時、「至聖なる生神女よ、我らを救い給え」と直接、救いを求めます。このことから、生神女マリヤが諸聖人よりも限りなく神に近い存在であることが判ります。

ちなみに私たちは洗礼の時に諸聖人の名前（携香女マグダラのマリヤ、致命女聖マリヤなど）を頂きますが、生神女マリヤの名を聖名として頂くことはできません。

生神女マリヤの胎は、樂園を追放されて以来、救いを待ち望んでいたがその術を見い出せずにいる人間と神の国の間に道を開きました。生神女は正教会の祈祷文の中で天と地との間に掛けられた「梯（かけはし）」と呼ばれます。

生神女マリヤが神使ガヴリイルから「福音（処女マリヤが身籠って男の子を生むであろうという知らせ）」を受けた時、彼女が、「私は神の婢ですから、神が善しとされることが私の身に起こりますように」と言って従順に「福音」を受け入れました。そのために凡そ人間の中で誰も祝福されたことのない恩寵—「神の母」であるという恩寵を受けたのです。ダマスクの聖イオアンはこの生神女マリヤの覚悟に人間の信仰の「自由な従順」と「神の恩寵」との最高の関係を見ることができると説いています。

主イイスス・ハリストスの十字架上の死は、預言者シメオンが

生神女マリヤに「あなたは剣で胸を刺し抜かれるであろう（あなたは剣で胸を刺し抜かれるような苦しみを受けるであろう）」と預言した通りになりましたが、生神女マリヤはこれも同じように従順に受け入れました。

生神女マリヤは、祈祷文の中で「恩寵を満ち被るもの」と呼ばれますが、その恩寵に満たされた様相は、生神女マリヤの就寝（永眠）の際にも見ることができます。

正教会では生神女就寝祭（12大祭）を8月15日／28日（ユリウス暦/グレゴリオ暦）に記憶します。生神女の就寝については、聖書にも信経にも記されていません。しかし正教会の聖伝に依る祈祷文は生神女の臨終の時、使徒たちが見守る中、主イイスス・ハリストスが自らその霊を迎えたことを次のように著しています。

「一切の造物は爾（生神女マリヤ）を送り、爾の子（主イイスス・ハリストス）はその不朽の手にて爾無瑕なる霊を接給えり」
（生神女就寝祭早課）

私たちは生神女マリヤが幼子イイスス・ハリストスを抱いた構図のアイコンをよく見ます。しかし「生神女就寝祭」のアイコンは、主イイスス・ハリストスが、まるで少女のような生神女マリヤを抱いています。これから天に昇って行く場面です。



「生神女就寝祭」のアイコン

主イイスス・ハリストスがただ一人「母よ」と呼んだ女性、至聖なる生神女マリヤ。

生神女マリヤを記憶する日（生神女福音祭、生神女誕生祭、生神女就寝祭など）、正教会は水色の祭服を用います。生神女マリヤの無垢、無瑕、貞潔、従順を表している色です。

主ハリストスの降誕



「主ハリストス降誕」のイコン

「信経」には主ハリストスの降誕について、次のように記されています。

「萬世の前に父より生まれ、光よりの光、真の神よりの真の神、我等の救いのために天より降り、聖神・及び童貞女マリヤより身を藉り人となり、」。

主ハリストスは真の神として、萬世の前に（＝凡そこの世にある見ゆると見えざる万物が存在する前から）既に聖三者（三位一体の神）の一つの位格として存在していました。しかし、私たち人間が、樂園において神の戒めを守ることができず（＝罪を犯したことに因り）、放逐されたが故に、私たちの救いのために（＝私たちが永遠に滅びることなく、再び神の国に入ることができるように）、天より降り（＝自らを低くして）、身を藉り人となった（＝私たち人間と同じ形でこの世に現れた）のです。

天の宝座に座する神が人間として生まれた場所は、宮殿でもなければ、普通の人家ですらない洞穴でした。上のイコンを見ると、飼い葉桶の中に横たわっている嬰兒（主ハリストス）を馬が優しく見つめています。主ハリストスはこのようにして天から降られたのです。天から降り、そして十字架に釘打たれ、しかし、神として死を滅ぼして三日目に復活するために。

これらのことは皆、人間を再び神の国の住人にふさわしい者とするために必要でありました。これが、神・父が神・子をこの世に遣わした御旨だったのです。

以上のことから判るように、「主の降誕祭」の中心的な心は「神の御旨の前における従順謙遜」です。ロシア語ではこの心の状態を「スミレーニエ **смирение**」と言います。凡そ人類が知っているあらゆる事象の中で、最たる「スミレーニエ **смирение**」は、主ハリストスの降誕でありましょう。

「主の降誕」を迎えるに際して正教会のもう一つの伝統は、降誕祭の前日の過ごし方、「ソチューリニク **сочельник**」と言われるものです。この日は、降誕祭前の斎期の最後の日となりますが、もっとも厳しい斎の日です。世の中では「クリスマス・イブ」と称して、パーティーやコンサートを楽しむ人たちで溢れていますが、正教会の信徒は、この夜を教会に参拝し、「今降誕される主ハリストス」のことを思い、静かに、敬虔に過ごします。

「主の降誕」は、紀元一世紀から教会で記憶する祭日となっていました。使徒規約には「兄弟よ、祭日を守りなさい。第一に主ハリストスの降誕であるが、これは第 10 の月の 25 日に祝うように」と記されています。「第 10 の月」とは、3 月から数えるので 12 月のことです。ここから 12 月 25 日に降誕祭を祝う習慣が始まりました。

「正教会信徒にとって降誕祭は 12 月 25 日に祝うべきか、1 月 7 日に祝うべきか」という教会暦に関する質問に対して、キリル総主教聖下は「私たちは日付を祝うのではなく、主ハリストスが降誕したという出来事を祝うのである」と答えています。

日本正教会の巡回教会においては、全く異なった様々な日付で降誕祭を祝うこととなりますが、キリル総主教聖下が言われているように、大事なことは、何を祝うのかを正しく理解し、信徒として然るべき心で降誕祭を迎えることです。

主・神は、人間の心を見る神ですから、クリスマスケーキやターキーやサンタクロースが有るか無いかを見ておられるのではなく、神が人となられたことを恐れ慎んで受け認める信仰を私たちの内に見ておられるのです。

主の昇天



「主の昇天」のイコン

信経には、主ハリストスの昇天について次のように記されています。

「天に升起、父の右に座し、光栄を顕すためにまた来たり、その国終わりなからんを」

昇天祭は正教会暦において十二大祭の一つに数えられる重要な祭日です。主ハリストスは復活の後、福音経に記されているように、40日間地上に居り、人々に現れて神の国についての教えを述べました。

40日目に主・神ハリストスは人間の肉体を備えたまま、弟子たちの見ている前で、彼らを祝福しながら天に昇りました。

昇天祭のステヒラには「光栄のうちに天に升起、我等の堕ちたる性を慈憐によってのぼして父と共に座せしめたり」と歌われています。この「我等の堕ちたる性」とは、その昔、人間がまだ樂園に住んでいた頃、神・父との約束を守れずに罪に陥り、樂園から追放された人間の人性のことを指しています。「人性」という言葉は、「神性」（神であること）に対して人間であることを指します。主ハリストスは真の神でありながら、真の人間としてこの世に降誕し、そして昇天しました。主ハリストスは神性と人性を備えています（私たちが十字を描く時、薬指と小指の二本指を手のひらに付けるのは主ハリストスの神性と人性を表しています）。

この昇天祭のステヒラは、主ハリストスが人性を藉って降り、

十字架上の死を経て復活し、再び神・父のもとに昇ったことによって、樂園から堕ちた人間が再び神の国の住人となるに堪うる者となったと教えているのです。

「父の右に座し」たという表現は、主ハリストスが天において神・父の右側に座ったという意味ではなく（神・父は神^o〔＝霊〕であり、在らざる所なきものであり、満たざる所なきものですから、右も左も形ありません）、神・父と同じ光栄を受ける存在として在り続けたという意味です。

さらに「聖使徒行実」には、この昇天が一方通行ではなく、主ハリストスは昇天した時と同じ様相で、この世の最後に、審判のために再臨することについて次のように記されています。

「其升れる時、彼等天を仰ぎたるに、視よ、二人白衣にして彼等の前に立ちて曰えり、ガリレヤの人よ、何ぞ天を仰ぎて立てる、爾等より天に升起し此のイイススは、爾等が其天に升るを見し如く、是くの如く復来らん。」

信経の中に記されている「光栄を顕すためにまた来たり、その国終わりなからんを」の部分が意味するところです。

私たちは聖体礼儀において、聖体拝領の後、「今もいつも世々に」の発放と共に神品によって王門の所で上に掲げられるポティールを仰ぎ見ますが、まさにこの瞬間が、主ハリストスの昇天と、最後の審判の際の再臨を表しているのです。

主ハリストスが天に昇られた場所については、「聖使徒行実」に次のように記されています。

「彼等は橄欖山と名づくる山よりイエルサリムに帰れり、此の山はイエルサリムに近くして、スボタに行く程なり」。

エレオン山は聖書にしばしば出てくる山です。「エレオン」とは訳語の漢字が示している通り、オリーブ（かんらん 橄欖）のことです。昔からこの山の斜面にたくさんのオリーブの木が植え



エルサレムから見たエレオン山。左上の尖塔は「主の昇天修道院」(ロシア正教会)の鐘楼。

られていたところから、それがこの山の名前となりました。主ハリストスが十字架に掛かる直前に祈った場所もエレオン山でした(ルカ22:39)。

「聖使徒行実」には、主ハリストスが天に昇っていった時、雲が彼を受けて覆ったと記されています。

昇天祭のトロパリ(讃詞)は、「ハリストス我等の神や、爾は光栄のうちに天に升起、聖神^oを遣わすを約して門徒を喜ばしめたり」と歌われますが、門徒(弟子)たちに聖神^oが降臨したのは、主ハリストスの昇天の10日後(=主ハリストスの復活後50日目)です。聖神^oを受けた使徒たちは、様々な言語で主ハリストスの福音を語り、主ハリストスの名によって奇蹟を行う力を得て、イエルサリムから地の四極へ遠く海を渡って伝道に出ました。五旬祭は「教会の誕生日」として記憶されます。生きた主ハリストスの体として、「教会」という姿が始まった日です。



イスラエルの地図とエレオン山(▲)

聖神^o・主、生命を施す者



「神現祭」のアイコン

「正教会の信仰とは何か」、「正教会の信徒は何を信ずるのか」ということを正確な表現で端的に記している「信経」ですが、その中核は聖三者である「神・父」、「神・子」、「神・聖神^o」への信仰です。

神・子である主ハリストスは自身の復活後、弟子たちに次のように言っています。

「爾ら行きて、万民に教えを伝えて、彼らに父と子と聖神^o との名によりて洗を授け、彼らを教え

て、我が一切爾らに命ぜしことを守らしめよ」

(マトフェイ 28：19-20)

「神・父」について私たちは、見ゆると見えざる万物を造られた全能者として理解しています。「神・子」については、私たちがいつもお祈りする時に見ているアイコンの主ハリストスです。それでは「神・聖神^o」とは誰でしょうか。彼ら三者が一体であって一つの神であるということはどういうことでしょうか。

「信経」においては、「神・聖神^o」について「生命を施す者、父より出で、父及び子と共に拝まれ、崇められ、預言者を以ってかつて言いしを」と記されています。

ここで信徒にとって確認が必要な文言は前半ではなく、むしろ後半の部分でしょう。「預言者を以ってかつて言いしを」とは、その昔旧約の時代に預言者たちが救主ハリストスの降誕について、十字架上の苦しみについて、三日目の復活について語ってきま

したが、それを語らしめたもの、預言者に語るべきことを啓示したものは「神・聖神^o」であるという意味です。

私たちは信仰生活の中で、このような目に見えない力の働きを「神・聖神^oの恩寵」と言います。目に見えないものですから、「これが神・聖神^oです」と言って指し示すことはできません。しかし、信仰によって私たちはそれが「在らざる所無きもの、満たざる所無きもの」であることを知っています。

聖三者が揃って、初めて世に姿を現したのは、ヨルダン河での主ハリストスの洗礼の時でした。それ故、主ハリストスの「洗礼祭」は「神現祭」（神が現われた祭り）とも呼ばれるのです。聖書には次のように記されています。

「イイスス洗を受けて、直ちに水より上がれるに、見よ、天彼のために開け、神の神^o鳩の如く降りて、その上に臨むを見たり、かつ天より声ありて言う、これは我の至愛の子、我が喜べる者なり」
(マトフェイ 3：16-17)

そして「神・聖神^o」が実際に人々に降り、その力を現し始めた日が「五旬節」（主ハリストスの復活後 50 日目）でした。聖書には次のように記されています。

「五旬節の日至りて、使徒皆心を一にして共に在り。忽ち天より声ありて、烈しき風の渡るが如し、彼らが座せる所の家に満てり。分かれたる舌、火の如き者、彼らに現れて、各人に止まれり。彼ら皆聖神^o に満てられて、異邦の言葉を言い始めたり、神^oの彼らに言わしめしが如し」
(使徒行実 2：1-4)

正教会ではこの日を「教会の誕生日」とみなします。五旬節の日、最初に「神・聖神^o」の“受け皿”となった人々、それは十二人の使徒たちと生神女マリヤでした。これは「使徒権の継承」の初め、即ち教会のヒエラルキーが確立した日です。今日まで、正教会では、五旬節に使徒たちが受けた「神・聖神^o」の恩寵が主教品



「五旬祭」のイコン

から主教品へ、そして司祭へと按手によって綿々と続いているのです。そして主教及び司祭が行う諸機密に与ることによって、教会に繋がっている全ての人々に「神・聖神」の恩寵が行き渡るようになったのです。

一つの神が三つの位を同じくする聖三者であるという真理を、人知を以って理解するのは難しいことです。

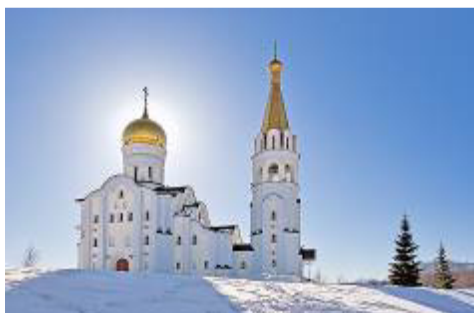
時として教会学校の先生たちからも『聖三者』ですが、もっと他に子供たちが解

る言葉は無いですか」と訊かれますが、「聖三者は「聖三者」ですと言うほかはありません。ロシアでも「Троица」（聖三者）は「Троица」です。要は、言葉を言い換えれば解るという次元のことではないのです。神の愛に近づき、神のように完全であろうとする各自の信仰体験の中でのみ見えてくるものだからです。

※正教会では人名、地名がギリシャ語やロシア語表記でなされている。

マトフェイ(マタイ)、イオアン(ヨハネ)、エフェス(エペソ)、ロマ(ローマ)など。

一の聖なる公なる使徒の教会



「信経」の中では、教会について「一の聖なる公なる使徒の教会」とであると記されています。

それは教会の頭は主ハリストスだからです。

エフェス書*には次のように書かれています。

「蓋し彼（神・父）はその力をハリストスの中に顕して、これを死より復活せしめ、これを己の右に天に座せしめて、凡その首領、権柄、能力、主制、及び凡そこの世のみならず、来世にも称うる所の名の上に置き、かつ一切を以ってその足下に服せしめ、彼を一切の上に立てて、教会の頭となせり、教会は乃ち彼の身にして、一切を以って一切を満つる者の充満なり」

（エフェス書第 1 章 20-23 節）

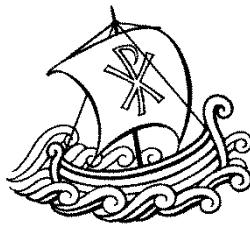
教会の頭である主ハリストスは、「我は道なり、真実なり、生命なり、人もし我に由らずば、父に来るなし」（イオアン伝**第 14 章 6 節）と言っています。道や真実が複数あるのではなく、道は一つであり真実は一つです。従って教会も一つです。また主ハリストスが頭であるのですから、その教会は「聖なる教会」です。

ちなみに、この「一つ」の意味の中には時と空間が含まれています。「時」というのは、今日ある教会は、初期の教会と本質的に同じあることを意味し、「空間」というのは、全世界に広がる各正教会が使徒権の継承によって正教会の純潔を護っている点において同じであることを意味しています。

五旬節の日より神・聖神^oの恩寵に満ちている教会は、洗礼を始めとする諸機密を通して、信徒の上にその恩寵を惜しみなく注いでいます。それは教会に繋がれている万民に対して平等であり、

民族や文化による差別はないのです。ロマ書****に「イウデヤ人とエルリン人とは区別なし、蓋し衆人の主は同一なり、凡そ彼を呼ぶ者のために豊かなる者なり。蓋し凡そ主の名を呼ぶ者は救われん」(第 10 章 12-13 節)と書かれている通りです。これが「公なる教会」という言葉が意味するものです。

「使徒の教会」とは、前項の「聖神°・主、生命を施す者」で触れたように、教会の誕生日が五旬節であること、使徒たちによって活きた教会の活動が始まったことを意味しています。正教会では使徒の継承者として主教と司祭がいます。彼らには福音や伝承を説き、教え、聖体機密を行い、神に与えられた羊の群れ(信徒)を牧し、罪を解く(または解かない)権が与えられています。



一の洗礼



第二回全地公会（コンスタンチノープル 381 年）／この時「信経」後半部分（「神・聖神^o」、「教会」、「洗礼」等）が審議・編纂された。

「信経」の構成の中で、「教会」という項目の次に「洗礼」が続いているのは、必然的な順番と言えるでしょう。なぜならば、人が教会に繋がれるのは洗礼を第一歩とするからです。洗礼は信仰生活の始めです。

洗礼によって、人は新たに生まれ変わります。洗礼を受ける時には、それ以前の人生において陥った罪が赦されます。それ故、洗礼を受けた時に着る洗礼着は純白です。

神の御旨に反すること、神の御旨に合わないことと決別し、神と結合して生きる人となる場面は洗礼において明確です。

『サタナ』及びその悉くのしわざ、その悉くの使い、その悉くのつとめ、その悉くの誇りを捨つるか」という司祭による三度の間に対して、洗礼を受ける者は「捨つ」と三度答えます。

その後、「これに嘘（うそぶ）き、これに唾（つばき）」するという行為がありますが、これは古くからの習慣をそのまま護っているもので、西に向かって息を吐き、唾するという動作によって、神の反対者サタナとの縁を切ったことを表象するものです。

この後、洗礼を受ける者は、改めて東に向き直り、主ハリストスを「王及び神と信ず」と宣言した後、誦するものが「信経」となります。正教の信仰を自分の口で言い表すのです。

通常、洗礼機密に続いて聖傳機密が行われます。

洗礼を終えた光照者にまず求められることは聖体拝領です。神との交わりの中最も大事な領聖に与り、ハリストティアニンとして神と常に共にある具体的な生活の一步を始めます。

従って洗礼機密は、実質的に三つの機密（洗礼機密、聖傳機密、聖体機密）が連携して完成する機密であると言えます。

我望む死者の復活並びに来世の生命を、アミン



「信経」のアイコン

ここに「信経」のアイコンがあります。「信経」に含まれているさまざまな内容を、それぞれ小さなアイコンで表し、それらを集大成して、一枚にしたものです。

五段構成で各段とも左から右へ進んで行き、左上の端のアイコンが出発点です。

即ち「我信ず、一つの神・父全能者、天と地、見ゆると見えざる万物を造りし主を」の祈祷文が記されたアイコンが配置されています。

「我望む死者の復活」という部分は、最下段（五段目）の真ん中の部分で、その隣（一番下の右端）のアイコンが「並びに来世の生命を、アミン」となっています。これを以って「信経」は完了します。

神学者 V.N. ロッスキイは「正教の教えの中で、この世の終わりに関する教えは非常に重要であり、もしこれを粗末にするならば、黙示録は形式的なモラルのようなものに成り下がり、死者の復活は何の意味もなさないことになる」と言っています。ここで思い出されるものは、正教会の埋葬式において読まれる福音書の箇所です。

「…凡そ墓の中に在る者は神の子の声を聞かん、而して善を行
いし者は生命の復活に出で、悪を為しし者は定罪の復活に出でん。
我何事をも己に由りて行ふ能わず、聞く所に従いて審判す、而し
て我が審判は義なり、蓋し我己の旨を求めず、乃我を遣しし父の
旨を求るなり」
（イオアン 5：24-30）

この世の最後には、主ハリストスが再臨し、凡そこの地上に生まれた全ての人々が復活し、人の霊（たましい）は新たな肉体を着、一人ひとりに対して審判が行われるのです。そこには「生命の復活」と「定罪の復活」の二通りがあり、この審判の結果は変わることなく、終わることがありません。「生命の復活」とは神の国である天国に入ることであり、「定罪の復活」とは地獄に下されることです。

首司祭アレクサンドル・シュメーマンは、次のように言っています。「信経のこの部分に至るまでのキーワードは『我信ず』である。信仰告白の終結部に来て、ここで初めて『我望む』という言葉が出てくる。「望む」という言葉は、「待つ」という言葉よりも強い気持ちを表す。人間は、全く知らないものを待ち望むことではない。『死者の復活並びに来世の生命』を見た者はいない。しかしこれがハリストティアニンにとって全く知らないものでないのは、何らかの知識の断片が為せる業ではなく、ひとえに主ハリストスの復活の光に照らされた信仰によるのである」。

大事なことは、正教会の洗礼を受けた信徒一人ひとりの信仰です。最後の審判が行われる時、人間はたった一人で主ハリストスの前に立たなければなりません。そこにおいて質されるものは、先祖の信仰ではなく「あなた」の信仰です。聖師父は「この世に生きている間に神の国を切望しなかった霊が、死後、神の国に入ることは無い」と言っています。神の国は、どこか遠い所に存在する異質な世界ではなく、先ず、地上に生きている間に自分の霊の中に得るべきものです。そうすれば最後の審判において「生命の復活」に与ることは、むしろ自然なことと言えるのです。





この稿は函館ハリストス正教会の教会報(2012～2014)に連載された「信経について」を加筆・修正しセラフィム大主教座下の祝福を得て刊行されたものである。

日本ハリストス正教会教団 東日本主教教区宗務局

〒980-0021 仙台市青葉区中央3丁目4番20号

電話 022-225-2744 Fax 022-224-3080

<http://www.orthodox-sendai.com/>

orthodox@hyper.ocn.ne.jp

2015年5月30日 発行